保育の中の小さなこと大切なこと①

守永英子

夏休みが終わり、二学期が始まって間もない三歳児のクラスのある日、私は、ままごとのグループの中に身を置いていた。というのは〝参加していた〟というほどの組織立った遊びでもなく、私のとった役割がはっきりしているわけでもなかった。ままごとの家の続きに敷いたござの上にすわって、請われるままに、数人の子どもたちに絵本を読んであげていた。A子とT子が、ままごと道具の棚のところで遊んでいた。そこへ、Y子が、庭から保育室へ戻ってきて、ままごとの棚に近づき「これ貸して」と小さな手さげかごに手をかけた。A子は、あわてて立ちあがり、「だめ」といったが、その時、Y子はもうかごの中にはいっていたおもちゃの果物などをつぎつぎと、取り出していた。A子は取られまいとかごを押えた。一瞬、険悪な空気が流れた。

次に起こることは、予想ができた。Y子はからだが小さく、幼さが残っていて、A子は、からだが人一倍大きくて、態度もおとなびた、はっきりした子どもである。瞬間、私は事の重大さを全身に感じ、最良の解決を探して心が駆けめぐるのを覚えた。

次の瞬間、私はA子に声をかけた。「下の棚にもう一つかごがないかしら？　あれ使っていなければ、貸してあげたら？」A子はすぐ下の棚から同じかごを取り出し、「これ使ってないから、いいわ」とY子に渡した。私は、Y子に「よかったわね」と声をかけ、A子に「どうもありがとう」と礼をいうと、Y子もA子に礼を言って、何事もなかったように庭へ出ていった。A子たちはままごとを続け、私は、数人の子どもたちに絵本の続きを読みはじめた。読みながら、私の中に、ほっと平和な気持ちが流れ、ひろがるのを感じた。

保育の中の、ありふれた、ほんの一こまの場面である。何故それほど、私自身が重大に感じたのか。いくつかあるであろう方法の中から、何故その一つを解決法として選び出したのか。その後、数日、そのことについて思いめぐらした。

Y子は、夏休みに妹が生まれたが、それまでは、父母と三人の生活で、ほとんど友だちと遊ぶという経験を持っていない。初めての集団生活が不安で、母親から離れずに泣いていたが、やっと自分で遊べるようになり、友だちとの関係も少しできかかってきた。「貸して」と言えるまでに成長してきたY子の気持ちをざせつさせたくない。友だちとのかかわりを不快に終わらせたくない――この思いが、私を極度に緊張させたように思われる。しかし状況は、A子の方に理がある。正当な主張はできる子どもであってほしい。他の人に対する思いやりも、性急に大人が外からの力でおしつけたものではなく、時間がかかっても、子どもの内から育ってきたものでなければ本当のものではない。

そのような、いくつかの思いを軸にして方法を探した時、その答えは、Y子にあきらめさせることではなく、A子に拒否に終わらせることでもなかった。そして第三の方法を示唆することで、Y子は、自分の要求を満たしてくれたA子にお礼を言い、A子は、自分に不満を残さない方法でY子の要求を受け入れ、お礼を言われた快さを味わったと思う。私も平和な気持ちに満たされ、私を囲んだ数人の子どもたちにもそれは及んだと想像する。

保育を外側から見れば、砂遊びであったり鬼ごっこであったり、絵本をみることであったり絵をかくことであったりする。しかし内側に身をおいてみれば、それは他の子どもたちや保育者とのかかわりを含んだ生活そのものなのである。

ありふれた生活の一こま一こまを、どのように経験していくか、それが子どもの成長に大きな意味をもつものと思う。

発達の程度が違い、状況が違い、かかわる子どもの性格が違えば、答えはいつも新しく探されなければならない。或る時は、黙って見守ることが必要であろうし、或る時は、ぎりぎりまで待って手を貸す必要がでてくるかもしれない。また、話し合いながら子どもたちといっしょに解決の道を探すことがよい場合もある。正答は用意されていない。その時どきに、そこにかかわるすべての子どもに望ましい経験になるようにという願いをキイポイントとして、自分の全力をあげて考えるよりほかはない。そして、自分の力の足りない点を子どもたちに詫びつつ、子どもといっしょに成長していこうと努力する――そこに、私は保育への道を求めているような気がしている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）